

鳴り砂と涙と道化師たち

三浦まどか

【登場人物】

水島貴子	(33)	会社員
早瀬拓海	(20)	大学生
吉田勇二	(61)	貴子の父・工房勤務
吉田幸江	(59)	貴子の母
水島健太郎	(36)	貴子の夫
小竹明美	(40)	貴子の従姉妹・工房勤務
久松政信	(42)	鉄製品工房経営

SE 貨物船入港、製鉄所などの音。

貴子M 「あなたは北海道有数の工業都市・室蘭に、鳴り砂の浜があるのを知っているだろうか」

SE 波の音。カモメの声。

貴子M 「イタンキ浜。アイヌ語で『ハワ・ノタ』、『声ある砂』。コーヒーシュガーのよ
うにきらめく砂は、踏みしめるとキュッ、キュッとやさしく鳴く」

SE 鳴り砂の音。次第に遠ざかっていく。

貴子M 「鳴り砂の夢をみた……まだ三時。浅い眠りを繰り返して、すぐに目が覚めてしま
う。夜の闇が怖い。静寂が怖い……」

SE 時計のカチカチと時を刻む音が続く。

貴子M 「不安でたまらず、ベッドから這い出し、夫の部屋の前に立つ。ドアの下から明か
りがもれている。眠れないのだ……耳をドアに当て、夫の気配を確認する。そ
して、また、ベッドへと戻り、眠れぬまま朝を待つ。こんな生活をずっと続けて
いる」

SE テレビ（朝の番組）の音。ガスを点火。調理する音。

貴子M 「夫が鬱病と診断され、休職して四年が過ぎた」

SE （貴子）ドアをノックする。

貴子 「健太郎さん。朝ご飯、できてるから」

貴子M 「夫は部屋から出て来ない。ドア越しの一方的な会話……」

SE 食器を片づける音。続いてシンクで洗う水流の音。

貴子M 「私も体調がすぐれない。食欲不振、吐き気、不眠……ずいぶんと痩せた……」

でも、仕事へ行かないと……：：：がんばれ……：：：がんばれ、貴子」

SE 電話が鳴る。水流が止まる。パタパタと走りながら。

貴子「（慌てて出る感じで）はい。水島でございます。ああ、お母さん。えっ？ お父さんが倒れた？」

貴子M「私は五年ぶりに故郷・室蘭へ帰ることになった……」

SE 車が（高速）道路を走る音。

貴子M「五月。前方に見える山の頂上には、まだ雪が残っていた。自然の景色など、もう何年も見ていなかった。この四年間、夫のことばかり見ていた。両親の健康を気遣う余裕もなかった。あの丈夫だった、お父さんが倒れるなんて……」

SE アクセルを踏み込む。

貴子M「懐かしい風景が見えてきた。父が永年勤めた製鉄所の高炉だ。私の実家はその一角、「鉄の町」輪西（わにし）にある」

SE 車が停車。ドアが開き降り立つ。

貴子M「母は、大丈夫だろうか。突然のことに取り乱していないだろうか」

SE 居間に駆け込んでくる。

貴子「お母さん！ お父さんは？」

幸江「まあ、貴子。来てくれたのね」

貴子「ひよつとして、入院？」

幸江「まさかあ。奥で寝てるわよ。まあ、座って。座って」

貴子M「母は、妙に落ち着き、にっこりと笑ってみせた。相変わらず明るい人だ」

幸江「ちよつと血圧が高かっただけみたい。薬飲んで寝ていれば大丈夫だって」

貴子「そうなの？ 電話で一大事みたいな言い方するから。まあ、安心したわ」

幸江「でも倒れた時は、大騒ぎだったのよ。貴子をすぐに呼んでくれた」
貴子「長期休暇までとって来たのに」

幸江「それなら、折角だもの、ゆっくりしていきなさいよ。全然、帰ってこないんだから。札幌からなんて近いでしょう？」

貴子「ウチは、それどころじゃないのよ」

幸江「えっ？ 何かあるの？」

貴子「いや、その、仕事、忙しいのよ」

幸江「だから？ 痩せたんじゃない？」

貴子「そうかなあ。(逃げるように)お父さんの様子みてくるね」

貴子M「なぜか、両親には、夫のことを言えずにいた……心配かけたくないからじゃない。きつと、両親は、私のことを一番に考えてくれる。それを恐れてい
る……」

SE 襖が静かに開く。

勇二「(弱々しく)貴子……」

貴子「あつ、起こしちゃった？」

勇二「どうしたんだあ？ 突然」

貴子「倒れたって、電話もらって」

勇二「お母さんが大げさに騒いだんだべさ」

貴子「(笑って)まあね」

勇二「仕事は？」

貴子「休みとってきた」

勇二「悪かったな」

貴子「ううん。有給たまってたから……ゆっくり休んで、早くよくなってよ」

勇二「ああ……」

SE 襖が閉まる。

貴子M「随分と白髪が増えた。父は製鉄所を定年退職した後、近くの工房に再就職した。そこでは、愛嬌たっぷりの鉄製の人形を作っている」

貴子「お父さん、大丈夫そうだね。安心した。じゃあ、私、帰るから」

幸江「お昼ごはんくらい食べて行ってよ」

勇二「（奥からきて）そうだ。そうするといい。また、いつ来られるか分からんべさ」

貴子「お父さん。寝てないとダメよ！」

勇二「はははは」

貴子「（軽く疑って）本当に病人なのお？」

幸江「（笑って）まあ、いいじゃないの」

勇二「貴子の顔見て元気がでてきたんだあ」

貴子M「両親との懐かしいやりとりに胸が詰まった……この場所から逃げ出したくなる……温かいと心が弱ってくる……」

勇二「お母さんの料理、久しぶりだべさ」

貴子「……わかった。お昼食べたら帰る。じゃあ、それまで、散歩してくるね」

幸江「寒いから温かくしていきなさいよ」

貴子M「家から十分。丘を越えたところにイタンキ浜がある。小さい頃、よく行ったものだった。歩きたびにキュツ、キュツ、キュツ……鳴り砂はいつも私に語りかけてくれた」

SE 激しい波、風の音がしている。

貴子M「今朝方の夢と同じ光景が広がっていた……背後にそびえ立つ断崖。灰色の空。激しく打ちよせる波。狂おしいほどの潮風……私独りが、ぼつんとそこにいる」

貴子「（ぼつりと）あれ？ 砂が鳴かない……確か、この辺りがよく鳴る場所だったはず……昨日、雨が降ったからかな……ん？ あっ、人がいたんだ……」

SE 大波がザバーン。

貴子M「波打ち際に一人の少年が立っていた……沖の方をぼんやり見つめている……手にしているのは、缶ビール？ あっ、ふらついてる……まさか……」

SE 大波がザバーン。

貴子「（恐る恐る）あの……ちよつと君……な、何してるの？」

拓海 「えっ？ （慌てて）ヤ、ヤバイ」
貴子 「ヤバイって、何慌ててるの？」

拓海 「いや。あの……」

貴子 「君、未成年だよね……どうして、顔を隠すの？」

拓海 「いや、何でも……うわぁ」

SE （拓海）海にバシヤーン。

（貴子）バシヤバシヤ。

貴子 「若いのに早まったらダメだよー」

拓海 「えっ？」

貴子 「お酒飲んで、勢いついてるだけ」

拓海 「あの、ちよっと」

貴子 「（必死）死んじゃダメーっ」

拓海 「オ、オバサン、落ち着いて」

貴子 「……（一転、不機嫌）オバサン？」

拓海 「いや、オネーサン。僕、自殺なんかしません。それに、酔ってません。これ、ゴミ
です。落ちてた空き缶」

貴子 「えっ？」

SE 吉田家のドアが開いて。

貴子 「（疲れて）ただいま……」

幸江 「（奥から出てきて）どうだった？ 久々の故郷の風景は……（驚き）ちよっと、

どうしたの？ びしょ濡れじゃない」

拓海 「おじやましーす」

幸江 「えっ？……この子は？……あらあら、こちらもびしょ濡れ」

貴子・拓海 「（くしやみ）くしゅん」

SE 居間でテレビ（お昼の番組）の音。

拓海 「あー、お風呂気持ちよかった。すみませんでした」

勇二 「いやいや、かえって悪かったね。せっかく旅行に来たっていうのに。とんだ迷惑か
けて。ウチの貴子、昔からおっちょこちよいなんだわ」

拓海 「ものすごい形相で迫ってくるから、僕も慌てちゃって」

勇二「貴子は小さい頃から気が強くて、俺も怒られてばかりだあ。ははは」
拓海「確かに、そんな感じですね。ははは」

SE まな板トントン。鍋がぐつぐつ。

貴子「（ぶつぶつ）人がいないと思って言ってくれるじゃない。お父さんとあの少年」

幸江「あの子、拓海くんですって」

貴子「あっ、そう……くしゅん」

幸江「ほら、貴子も早くお風呂入って！」

SE 浴槽にザパーンと入る。

貴子M「何で咄嗟に、あの拓海という少年が自殺すると思ったんだろう……寂しそうに漂う後ろ姿……あの日の夫の背中とだぶって見えたんだ……そう、あの日の」

SE デパートの店内。

貴子「ねえ、どのネクタイがいい？」

健太郎「（考えて）うーん。そうだなあ」

貴子M「私と夫が結婚したのは六年前だった。私は専業主婦になった。料理教室に通い、趣味でガーデニングを始めた。ペランダは、たくさんの花で埋めつくされた。幸せの数だけ花が咲いているような気がした」

貴子「……あっ、これなんかどう？」

健太郎「ネクタイに一万五千円？ もう少し安いのでいいよ。すぐに傷んじゃうから」

貴子M「結婚して一年、夫は新しい部署へと異動になった。異例のスピード出世に、私たち二人は素直に喜んだ」

貴子「私からのプレゼントなんだから奮発してもいいでしょう？ スーツとかネクタイで相手に与える印象が全然違うんですって。商談とかも左右するって」

健太郎「（笑って）じゃあ、このネクタイして、もっと仕事がんばるよ」

貴子M「しかし、夫からは次第に笑顔が消えていった……食欲はなくなり、疲れているのに眠れない日々が続いた。半年後、ついに出社する気力を失った……鬱病だった……会社を休み、薬の服用とカウンセリングで、症状はすぐに改善した。そして、会社に復帰した翌週、月曜の朝……夫はクローゼットの天井ポールに紐をかけ、自殺しようとした……私は宙に浮いて漂う夫の背中を、目の当たりにしたのだった」

貴子「（半狂乱）健太郎さん！」

SE 重みでポールから外れ、ドターンと床に転げ落ちる音。

貴子M「私は、夫の首に巻きついた紐を、夢中で外した」

健太郎「（苦しそうに）げほ、げほ……貴子……死なせてくれないか？」

貴子「（呆然と）もう、会社に行かなくていいから……行かなくていいから……」

貴子M「夫をきつく抱きしめ、何度もそう繰り返した。あまりのショックに、ただ呆然としていた……夫が自殺に使った紐は、私がプレゼントしたネクタイだった。これまでの夫の人生を象徴するような、ブランド物のネクタイ……」

SE 浴室の向こうのドアが開いて。

幸江「（向こう側で）相変わらず長風呂ね。ごはん、できたわよ」

貴子「（我に返り）あっ、はい」

SE 浴槽から勢いよく出る音。

貴子M「食卓には、懐かしい母の手料理が並んでいた」

勇二「拓実くんは、東京から来たのかい」

拓海「はい」

幸江「どうりであか抜けてるものねえ」

拓海「そうですか？（照れ笑い）ははは」

貴子M「昔にタイムスリップしたような家族団欒だった。笑い声のする食卓……ひとつ不思議なのは、そこに拓海という少年がいることだった」

幸江「年はいくつなの？」

拓海「二十歳です」

貴子「二十歳？ ホント？ 実は家出してきた高校生じゃないの？」

拓海「カチーン……これ、（ゴソゴソと出して）学生証です」

貴子「あれ、本当だ。早瀬拓海。1987年5月5日生まれ」

幸江「どれどれ。まあ、医学部ですって。優秀なのねえ」

勇二「将来は、お医者様かあ」

貴子「へえー。人は見かけによらないね」

幸江「貴子ったら、失礼よ」

拓海「その通りだから、いいです。おかわり！……って、いいですか？」

幸江「ええ。どんどん食べて」

拓海「はい。このイカと大根の煮つけ最高」

貴子「でも、何で東京の大学生がこの時期に室蘭にいるわけ？」

拓海「えっ？ それは……はは」

貴子「笑って、ごまかしてるし……」

勇二「まあ、せつかく来たんだから、室蘭の名所案内してあげるわ」

拓海「（嬉しそうに）いいんですか？」

勇二「迷惑かけたんだあ。それくらいするべき。なあ、貴子！」

貴子「えっ？ 私？」

勇二「お父さん、病人だもんなあ」

幸江「そうよねえ。大事とらないとねえ」

貴子「（しぶしぶ）わかったわよ」

拓海「貴子さん、よろしくお願いしまーす」

貴子M「何て調子のいいヤツ……」

SE (地球岬) 風の音。波の音。

拓海「へえー。これが地球岬かあ」

貴子「水平線をよく見て。まっすぐじゃないでしょう？」

拓海「ホントだ。地球って丸いんだなあ」

貴子「ひっかかった。目の錯覚らしいわよ」

拓海「（笑って）確かに。地球がそんなに小さいわけないよね」

貴子M「人間には嗅覚がある。野性の名残りなのだと思う。会った瞬間に、その人間を嗅ぎ分ける。自分に近い人間か。遠い人間か。拓海は近い人間なのだ。本能的に感じてい。だから、知り合ったばかりなのに、すんなりと存在を受け入れてい
る」

SE (地球岬) 「幸福の鐘」の音。

貴子「『幸福の鐘』男ひとりで鳴らすなんて惨めだね。普通はカップルで鳴らすのよ」

拓海「貴子さんは、あのエリートさんのダンナと鳴らしたんだ」

貴子「エリートって、誰に聞いたのよ！」

拓海「おばさん。リビングに写真飾ってあったでしょう？」

貴子「(ぼつりと)もう、お母さんたら、余計なことを……」

拓海「貴子さん、ダンナがエリートじゃなくても結婚してた？」

貴子「えっ？……それは……」

貴子M「そう。拓海とは対照的に、夫は遠い人間だった。だから、強く惹かれた。恋におちた……」

拓海「あっ、答えに困ってる。正直だなあ」

貴子「あんまり生意気言ってる段ボールに詰めて、東京に送り返すわよ」

拓海「貴子さん、ダンナには、そんな面白いこと言ったりしないでしょう？」

貴子「えっ？」

拓海「凶星！ 可愛い妻を演じてるわけだ」

貴子M「(むっとして)こいつ……でも、私……元気になって……何か、心が軽くなってる」

貴子「次は、どこに行く？ 白鳥大橋(はくちようおおはし)？」

拓海「イタンキ浜」

貴子「えっ？ また？」

拓海「だって鳴り砂の声、聞きに来たから」

貴子「えっ？ そうだったの？」

SE (貴子の) 携帯が鳴る。

貴子「もしもし。ああ、お母さん。明美お姉ちゃんのところ？ うん、わかった。寄ってみる。私も会いたいし」

SE 携帯を切る。

拓海「お姉さん、いたんだ」

貴子「親戚のお姉ちゃん。すごく可愛がってもらったの。結婚して東京に行ってたんだけど、二年前に戻ってきたのよ」

拓海「ふーん」

貴子「お父さんと同じ工房で働いているの。ずっと、会いたかったんだけど、私も帰ってきたの五年ぶりだから」

拓海「ダンナとケンカしてきたとか」

貴子「ううん。お父さんが倒れたって言うから、帰ってきたのよ」

拓海「倒れたって、おじさん？ 元気そうだけどなあ。だから、パジャマだったんだ」

SE (工房の) ドアが開く。

久松「いらっしやいませ」

貴子「吉田の娘の貴子です。いつも父がお世話になってます」

久松「ああ。吉田さんの。こちらこそお世話になってます」

貴子「今日は父が突然、休んでしまって、すみませんでした」

久松「いやいや。こっちは大丈夫だから、ゆっくり休養するように伝えて下さい」

貴子「ありがとうございます」

久松「明美さんだね。明美さん。貴子さんだよ！」

明美「(奥から) はい。今、行きまーす」

拓海「へえー。面白い。この人形」

久松「室蘭名物なんだ。お土産に、ちよっとした人気だね」

明美「(入ってきて) 貴ちゃん！ 来てくれたのね。うれしい！」

貴子「ご無沙汰してます」

拓海「こんにちは」

明美「ああ。そちらが東京から来たという」

拓海「早瀬拓海です」

明美「拓海くんね」

久松「東京からお客さんが来たなら、お持てなししないとな……よし！ みんなで、焼き鳥、行くぞ。仕事は早めに切り上げて」

明美「（苦笑い）いいんですかぁ。社長」

SE 焼き鳥が、ぱちぱちと焼ける音。

久松「こんな季節に室蘭になんて珍しいな」

拓海「亡くなったおじいちゃんが、室蘭出身でよく話を聞いていまして……数日前、イタンキ浜の夢を見たんです。それで」

貴子「夢？……来たことないのに？」

拓海「不思議なんですけど」

久松「で、実際どうだった？」

拓海「鳴り砂の声、聞けませんでした」

貴子「私もさつき行ったんですけど鳴かなくて。雨のせいかなって」

明美「それは残念ね。せっかく来たのに」

久松「だったら、聞けるまで待てばいい！ 待つと言えば、まさしく『イタンキ浜のアイヌの伝説』だな」

拓海「アイヌ伝説？」

久松「ああ。イタンキというのはアイヌ語で『お椀』を意味するんだよ。不漁による飢えから、この地にたどり着いたアイヌの人々は、浜から見える岩を鯨だと思った。だから、流木をたきぎにしながら暖をとって待ち続けた……」

SE 薪が燃える音。アイヌ民族音楽か楽器（ムックリなどの）音。

久松「流木もなくなると、自分たちの持ってきたお椀まで燃やした。鯨じゃなくて岩だというのになぁ……そして、ついに飢えと寒さで命尽きてしまったんだ……」

拓海「期待して待ってたのに、何か悲しい結末ですね」

久松「人生、全てが思い通りにいくとは限らないってことだな。ほら飲んで、飲んで」拓海「いただきます」

明美「社長、手加減してあげて下さいね」

久松「がははは」

SE 焼き鳥が、ぱちぱちと焼ける音。

拓海「（酔い口調）どうして焼き鳥なのに豚肉なんですかぁ？」

久松「（酔い口調）どうしてって、室蘭焼き鳥だからだ！ 肉は豚、間にはタマネギ、洋がらしをつけるのを忘れてはダメだ！」

明美「二人とも気があつてるみたいね」

貴子「（笑つて）こんなふうに楽しく酔えて羨ましいですね」

明美「……貴ちゃん、痩せたね」

貴子「明美お姉ちゃんこそ」

明美「いろいろあったからねえ……離婚は仕方なかった。でも、真由を手放したことが……私、鬱病だったのよ」

貴子「えっ？ 鬱病……」

明美「女手ひとつで真由を育てていかなければって気負ったところに、職場でいじめにあつてね」

貴子「いじめですか？」

明美「ええ。何が気に入らないのか、私だけを目の敵にする人がいて……子供じゃないんだから、我慢できるって自分に言い聞かせるんだけど、精神的に参つてしまつて、会社も辞めざるおえなかつた……」

貴子「それで真由ちゃん、ご主人の方に」

明美「真由の将来を考えたら、それしかなかつた。でも、真由には、私の病氣のことを理解してもらえなかつた……」

貴子「えっ？」

明美「真由を育てるのが面倒くさくなつて、何もかも投げ出したように見えたみたい。毎日何にもできずに家でごろごろしているんだから……」

貴子「真由ちゃんの気持ち、分かります」

明美「えっ？」

貴子「実は、うちの夫も鬱病で、休職して四年になるんです」

明美「そうだったの」

貴子「もちろん病氣のことは理解できるし、受け入れているつもりです。それでも、ときどき疑念を抱く自分がいるんです。本当は甘えているだけなんじゃないのつて。挫折を知らないで順風満帆で来た人だったから……理解者であるべき自分がどんどん嫌な人間になつてきて」

明美「自分を責めちゃダメだよ」

貴子「でも……今では口をきくこともないんです……何のために一緒にいるんだろうつて……ときどき夫に対して愛情があるのかも分からなくなつて……私も限界一歩手前かなあ。慢性の食欲不振と不眠」

明美「でもね。長く暗いトンネルの先には必ず出口があるのよ……光が差し込んでる。

そこに向かつて、ゆっくりと手探りで歩いていくしかないのよ。私がそうだった」

貴子「気持ち少し楽になりました」

明美「もっと早くに相談してくれたら、よかつたのに」

貴子「何かこういうことって言いづらくて。両親も知らないんです」

明美「そう……これからは何でも言ってる。私は、貴ちゃんのお姉さんだからね」

貴子「ありがとうございます」

拓海「（酔い口調）貴子さーん。帰るよー」

貴子「帰るよって、君のウチじゃないでしょうが！」

明美「貴ちゃん、すっかり懐かれてるね」

貴子M「その日、拓海は、我が家に泊まることになった」

SE 雨が屋根に当たる音。

貴子M「真夜中の雨……眠れない……夫のことが心配で、胸騒ぎがして、少し眠っても、すぐに目が覚めてしまう……電話してみようか。いや、きっと夫は出ない」

SE 居間でテレビ（朝のニュース）の音。食器を並べる音。

拓海「おはようございまーす」

幸江「ああ、拓海くん。おはよう」

勇二「よく眠れたかい？」

拓海「はい。ぐっすり」

幸江「朝ごはん、できてるわよ」

拓海「すみません。今朝もうまそー」

貴子M「拓海の元気な声がする。人の声で目覚めるのは悪くない」

SE （拓海たち）食事する音。

拓海「鳴り砂を守る活動ですか？」

勇二「ああ。今は百人近くが参加しているんだよ。俺とお母さんがしているのは主に清掃作業だけだな」

幸江「鳴り砂の正体は、ガラスの材料となる石英の結晶なのよ。別名『天使の涙』」

拓海「天使の涙かぁ」

勇二「踏んだり擦ったりすると、粒子に力がかかって、振動することで音が出るんだわ。でも、実はそれだけじゃ鳴かない」

拓海 「そうなんですか？」

勇二 「砂の粒の大きさが揃っていて丸みがあること。そして、汚れていないこと」

拓海 「（感心して）へえ……」

幸江 「少しでも汚れているとだめなのよ。煙草の灰ひとつでもね。イタンキ浜は日高地方から海流で運ばれてくる砂の終着駅なの。だから、私たちは、鳴り砂の自然を後世に残したいと願っているのよ」

貴子 「（ぼうっとして）おはよう」

幸江 「おはよう、貴子。おみそ汁温めるね」

貴子 「ごめん。食欲ないからいい」

幸江 「朝食、食べないと体によくないわよ」

拓海 「そうですよ。こんなにおいしいのに」

幸江 「もう、拓海くん、ありがとう」

貴子M 「相変わらず、調子いいし……」

拓海 「今日は、イタンキ浜に連れて行ってくれるんですよ」

貴子 「何で？」

拓海 「昨日、飲みに行っ、行けなかった」

貴子 「確かに」

拓海 「おじさんに代わって、清掃してきます。泊めていただいたお礼に」

勇二 「そうかい？　じゃあ、頼もうかな」

幸江 「今日こそ、鳴り砂の音が聞けるといいわね」

拓海 「はい。貴子さん、早く行きましょう」

貴子 「子供じゃないんだから、一人で行けばあ？」

拓海 「（寂しそうに）ひ、ひとりで……」

貴子 「何よ。そのうるうるした眼差しは……わかったわよ。連れていくわよ」

拓海 「やったあ」

SE 強風。激しい波の音がしている。

貴子 「鳴らないね。夜中、雨が降ったし、しばらく待つ？」

拓海 「待つのは、つらいよね」

貴子 「えっ？……ああ。アイヌ伝説かあ」

拓海 「期待して、待って、待って」

貴子 「何か話があげさじやない？」

拓海「ある日、突然、ダンナが元気になってるって」

貴子「えっ？」

拓海「で、やっぱり部屋にこもっているダンナを見て今日もダメかって……違う？」

貴子「どうして……あつ！ 昨日、明美お姉ちゃんとの話、聞いてたのね」

拓海「僕って、聖徳太子なみだから。一度にいろんなことが聞き取れちゃうんだよね」

貴子「……ウチの親には言わないでね」

拓海「分かっている……ねえ、貴子さん。シンクロニシティって知ってる？」

貴子「シンクロニシティ？」

拓海「共時性、つまり偶然の一致」

貴子「偶然の一致か……言いたいこと、何となくわかるよ。私も、ここに来る前、イタ
ンキ浜の夢みたから」

拓海「えっ？ すごいなあ。そんなところもシンクロニシティだったんだ」

貴子「で、それがどうしたの？」

拓海「単純に言えば偶然の一致だけど、それは言い換えたら必然の一致」

貴子「必然？」

拓海「会うべくしてここで会った。何か見えない力で引き寄せ合ったって感じかなあ」

貴子「何かさえない口説き文句に聞こえる」

拓海「僕、すっごくいいこと言ったつもりなんだけど……」

貴子「でも、同じように夢をみて、イタ
ンキ浜で会った。それは、確かに偶然という簡単なものではなさそうだね」

拓海「しかも、境遇も似てるんだ……」

貴子「えっ？」

拓海「うちのアニキも貴子さんのダンナと同じなんだ……」

貴子「うそ……お兄さんが？」

拓海「受験に失敗して二浪が決まってから」

貴子「そうだったの……」

拓海「僕が傷つけたんだ」

貴子「えっ？」

拓海「年子のアニキは小さい頃から成績優秀。両親の期待と愛情をずっと独り占めしてた。一方、僕は中学受験にも失敗した落ちこぼれで。いつも比較されるから、ひねくれて反抗ばかり。完全に両親に見離されてた。まあ、世間でよくある話なんだけ
ど」

貴子「よくある話って……」

拓海「だからさ。いつか見返してやろうって、隠れて勉強して、アニキが目指していた医
大を受けてやったんだ。当てつけに」

貴子「で、本当に合格しちゃったんだ」

拓海「そう。何の間違いか。で、アニキはまたダメだった。一発逆転。ザマーミロ！ 僕を見下してきた罰だ！ とか有頂天になった。両親の僕への態度は軟化するし、ちよつといい気分だった。でも部屋に引きこもったアニキを見るにつけ、いたたまれなくなった。母親もアニキの教育に依存してた人だったから、毎日泣いてばかり：：：アニキ、リストカットしたんだ：：：：」

貴子「リストカットって：：：自殺：：：：」

拓海「傷も浅くて大したことなかったんだけど：：：血が流れるのを見て恐くなった。その日から眠れなくなった。隣の部屋で少しでも物音がする度に：：：アニキが死んじゃうんじゃないかって、飛び起きてしまうんだ：：：：」

貴子M「拓海はまるで私だ。だから、拓海の気持ちが嫌というほどわかった。わかりすぎるから、夫が自殺しようとしたことは言えなかった：：：：」

拓海「僕は、そんな屈折したヤツなんだ：：：劣等感いっぱいダメ弟のままだった方が、よかったんだよね：：：：」

貴子M「そんな顔しないで：：：そんな悲しい顔をしたら、私まで泣きたくなくなってしま
う　　：：：だめだ：：：：」

貴子「（わざと明るく）君、偉いよ」

拓海「えっ？」

貴子「（淡々と）本当なら、グレてもおかしくないところなのに、それをやる気に変えたんだから。うん、すごい。見直した」

拓海「：：：なんか、拍子抜けした。嫌なヤツだって責められると思ったのに」

貴子「何で責めるの？ 褒めるところでしょ？ がんばったよ」

拓海「（呆氣にとられて）僕の人格を築き上げてきた長年のコンプレックスを一蹴された。屈折した青春時代：：：自分じゃ結構、悲劇を演じて来たつもりだったのに」

貴子「何となくだけど、君という人間が苦悩を背負ってるって、察しはついてたよ」

拓海「えっ？」

貴子「たくさん傷ついて生きてきた人間は、妙に明るく振る舞って人に気を遣うから：：：君の屈託のない笑顔と、人懐っこい態度から、想像ついたよ」

拓海「貴子さん：：：：」

貴子「自分はこんなにつらいですって、言葉や表情や態度に出せる人って、意外に強かったりするんだと思うのよ。自分をさらけ出しているんだから。一方、弱い人間はそ

れをひた隠しにして道化を演じてみせる。道化師（ピエロ）。君はまさにそのタイプだよ」

拓海「（笑って）ちょっと、うるつときた」

貴子「君は明るいし、きつと友達もたくさんいる。でも絶対に弱い自分を見せない。辛いと打ち明けたりしない。友達も、君が苦しんでいるなんて思いもしない。違う？」

拓海「（じーんときて）参ったな……」

貴子「ここに誘ってくれたのも、私が苦しんでるのを心配してくれたからだよね」

拓海「きつと僕の方が、聞いて欲しかった」

貴子「ほら、謙遜して。そういう気配り、普通の二十歳にはできないよ。君は人のことを思いやることができるいい子だよ。あれっ？ 本当に泣いてる？」

拓海「（グスツとして）大人の男は、そう簡単に泣かないんだな、これが。こう、握り拳を作ってさ。ぐつと堪える」

貴子「（笑って）君が大人の男かは別として、握り拳作るのは分かる。そうやって、泣かないできたんだよね。君も私も……」

拓海「いちばん辛いのは、アニキと貴子さんのダンナだって分かっているからね」

貴子「私、どうすればいいのかな？」

拓海「二十歳の僕に聞くんだ」

貴子「（笑って）何もかも分かっているような口をきくじゃない」

拓海「じゃあ、砂に聞いてみれば？」

貴子「えっ？」

拓海「きつと答えてくれる……あっ！」

SE 一瞬、鳴り砂の音。

貴子「鳴った」

拓海「これが、鳴り砂の声……」

貴子「そうだよ。耳を澄ましてみて……」

SE 鳴り砂の音が続いて。

拓海「なんか……切なく鳴くんだなあ」

SE 鳴り砂の音が続いて。

貴子「……で、答えは？ 鳴り砂は君に何て言ってくれたの？」

拓海 「家出少年よ。ここでのんびりしていきなさい！」

貴子 「やっぱり旅行じゃなくて、家出だったのね」

拓海 「（笑って）ははは」

貴子 「いいよ。のんびりしていきなよ。あんなウチでよければ」

拓海 「あんななんて！ 貴子さんのご両親、最高だよ。楽しくて、ほんわかしてて。あ

あ、こういうのが家族なんだなって思った。ホームドラマの息子気分」

貴子 「親のこと褒めてくれて、ありがとう」

拓海 「いえいえ……」

貴子 「私は午後、札幌に帰るから」

拓海 「えー、帰っちゃうの？ もう少し、いればいいのに」

貴子 「ひよっとして、私と一緒にいたいとか。あはは」

拓海 「その通り」

貴子 「普通そこで、赤面して慌てない？」

拓海 「説教くさくて、母ちゃんって感じ！」

貴子 「ちえー。母ちゃんかい！」

拓海 「ちえーとか、ダンナと別れてから言ってよ」

貴子 「だね」

拓海 「あっ、やけに素直だ」

貴子 「（しんみりと）夫は、私が別れたって言い出すの待っているのかもね。妻の存在って時には重荷だよね……この頃思うのよ……私がいなければ、夫はあんなに苦しまなくていいんじゃないかって。楽になれるのかなあって」

拓海 「（同調して）そこも同じだ。僕の存在が、アニキを苦しめているんじゃないかって思ってた」

貴子 「ほんとに似たもの同士だね」

拓海 「だからシンクロニシティ……」

貴子 「さあ、そろそろ帰るよ」

拓海 「了解！」

貴子 「その前に、明美お姉ちゃんのところへ、寄っていい？」

SE （工房の）ドアが開く。

久松 「いらっしやいませ」

明美 「あっ、貴ちゃん。拓海くんも」

拓海 「昨日は、ごちそうさまでした」

久松 「いやいや。こっちも楽しかったよ」

貴子「私、午後に札幌に帰ります」

明美「えっ？　もう、帰るの？」

貴子「はい。お父さんも大丈夫そうだし」

明美「ご主人のこと、話さなくていいの？」

貴子「余計な心配かけたくないから」

明美「（困って）えー、どうしようかなー」

貴子「ん？」

明美「実は……おばさんに頼まれてたの」

貴子「頼まれた？」

明美「おじさんもお婆さんも、ご主人の病気のことを知っているの」

貴子「えっ？」

明美「貴ちゃんが言わないのは、訳があるからだろうって。だから、私になら話すかもしれないから、相談にのってやってってくれて。実は社長もグルで」

久松「いやー、だから、昨日、無理矢理、飲み連れ出したわけで……」

貴子「（驚いて）そうだったんですか」

明美「心配でたまらなくて、おじさん仮病をつかって、貴ちゃんを呼び寄せたの」

貴子「えーっ！　仮病？」

明美「おじさん一世一代の大芝居だったの」

貴子「お父さんが……」

拓海「貴子さんのご両親で本当にすごい！」

SE　吉田家のドアが開いて。

拓海「（明るく）ただいま！」

貴子「（しんみり）ただいま……」

勇二「おお、戻ってきた」

幸江「拓海くん、お掃除、ご苦労様。今、温かいお茶入れるわね」

拓海「はい。いただきます」

貴子「お父さん、体なんともなかったのね」

勇二「えっ？……あつ、バレたか」

幸江「だって、お父さん、演技下手なもの」

拓海「（笑って）そんなことないです。貴子さんも、僕もちやんと騙されましたよ」

勇二「ははは」

SE　急須から湯呑みに茶を入れる音。

幸江「今年の初め、健太郎さんのお母さんから電話をもらったの」

貴子「えっ？」

幸江「もう、貴子を解放してあげたいって」

貴子「解放？」

幸江「まだ若いし、やり直せるからって」

貴子「やり直せるって……」

幸江「離婚した方が貴子のためにいいんじゃないかって……」

貴子「健太郎さんのお母さんが……」

幸江「向こうのご両親、健太郎さんのことより、貴子の体の方を心配してらしたわよ。随分と痩せたって」

貴子M「私、一人で抱え込んで、一人でがんばっているつもりだった。私、知らない間に、たくさんの人に守られてたんだ」

幸江「貴子がどう思っているのか知りたかったの。嘘ついたりしてごめんね」

貴子「ううん。私こそ、心配かけて……四年間も言えなくて、ごめんね……」

勇二「俺らに言ったら、なんか意見されると思ったか？」

貴子「えっ？……」

勇二「お父さんたちは、そんなに小さい人間じゃないぞ……貴子がんばってるんだから、後ろから声援をおくるだけだあ」

貴子「お父さん……」

幸江「親は心配するのが仕事なのよ。子供がいくつになってもね」

貴子「ありがとう……」

貴子M「私は両手に握り拳を作り、涙を堪えた。泣かなかった。今、泣いてしまったら、張りつめていた心が壊れて、もう、がんばれなくなると思った」

勇二「貴子、手を出してみれ」

貴子「えっ？ 何？」

勇二「ほら、拓海くんも」

拓海「えっ？ あ、はい」

貴子M「父は鉄製の人形を私と拓海の手ひらに乗せた。父が毎日、工房で作っているものだ」

貴子「あっ、温かい……」

拓海「ホントだ……温かい……」

勇二「お父さんが手で握ってたからだあ」

貴子「そっかあ。鉄だから手の温度がこんなに伝わるのね」

勇二「貴子。大丈夫だ」

貴子「えっ？」

勇二「人の手の温かさが分かるなら、大丈夫だあ」

貴子「お父さん……」

勇二「拓海くんもな」

拓海「おじさん……ありがとうございます。大切にします」

貴子M「拓海は両手で、人形をぎゅっと握りしめた。私も握りしめた。強く、強く」

SE 家族団欒の音が響いて。

貴子M「その日も、私は、夫の元へ帰らなかつた。この温かさから離れたくなかつた……
：少しだけ肩の力を抜いて、自分を甘やかそうと思つた……」

SE 家の外、風の音がしている。

貴子M「その夜、私は、久しぶりに、つづけて眠つた。そして、明け方、物音で目が覚めた」

SE ガタガタと音がする。

玄関から人が出て行く気配。

貴子M「ん？ 三時半？……今、玄関が開いたような……気のせい？」

SE (貴子) 廊下を歩く音。

貴子M「えっ？……拓海の靴が、ない……まさか……(不安に揺らいで)いやだ。いやだ……」

SE (貴子) 慌てて用意する感じで。

貴子M「私は慌てて着替え、とりあえず携帯を手に家を飛び出した」

SE (貴子) 道路を走る。

はあはあという呼吸に重なって。

貴子M「どうしよう……拓海の苦悩を、もったときちんと受け止めてあげればよかった：……初めてあったとき……やっぱり、拓海は海に飛び込もうとしたのかもしれない……あっ！ イタンキ浜だ……きつと、そうだ……待って、拓海。今 行くから。今行くから……」

SE (貴子) はあはあという呼吸が続く。

遠くに (拓海) 叫び声。

拓海「(遠くで号泣) うわあー。わあー」

貴子M「えっ？ 拓海？」

SE 波音と海風。拓海の号泣に被さって。

拓海「うわあー。わあー。あー。辛かったよー。ずっと、ずっと、辛かったよー。家族から愛されなくて、寂しかったよー。いつも、アニキと比較されて、くやしかったよー。ダメな人間だって言われて、悲しかったよー。がんばってるのにー。なんで、いつも惨めなんだよー。どうして、誰も認めてくれないんだよー。うわあー」

貴子M「拓海は泣くために、このイタンキ浜にやってきたんだ。泣きたくて……泣きたくて……ただ、無性に泣きたくて」

SE 波音と海風。

拓海の号泣が次第に消えて。

貴子「ごめんね。泣きたくて、ここに来たんでしよう？」

拓海「(ぐすっ。ぐすっ)」

貴子「私があるこれ、やかましいから、泣く暇なかったんだよね」

拓海「そっちだって(ぐすっ) 僕がいたから(ぐすっ) 明るくしゃべりまくって(ぐす

っ）泣く暇なかったくせに……」

貴子「そんなことないよ」

拓海「泣いちゃえよ」

貴子「えっ？……」

拓海「ほら」

SE 砂を踏みしめる。鳴り砂がキュッキュツと音を出す。

拓海「素直に泣けって、砂が言ってくれてるじゃん」

貴子「な、何で（ぐすつと）私が（ぐすつと）君と一緒に、泣かないと……うっ、うっ……（号泣）うわぁー」

SE 波音と海風。貴子の号泣に被さって。

貴子「辛いよー。ずっと辛かったよー。こんなにがんばってるのにー。どうして何も変わらないのー。身も心もボロボロだよー。いつまで、こんな生活続ければいいのー。どうしたらいいのー。助けてよ。助けてよ。悲しいよー。苦しいよー。うわぁー」

貴子M「私は子供のように泣いた。気が狂ったように泣いた。ため込んだ涙がすべてかれるまで泣いた……」

SE 波が穏やかに打ち寄せている。

貴子「男って大変だね。女みたいに泣けないもんね」

拓海「自分だって女なのに泣かないじゃん」

貴子「三十過ぎると若い頃みたいに泣けなくなるのよ。泣く場所もないし。人間、泣かないと頭がおかしくなっちゃうのかもね」

拓海「うん……僕、小さい頃、すっごいやんちゃで、優等生的な育て方をしたい母親に、いつも怒られてたんだ。するといつもおじいちゃんが「男だからって我慢することはない。思い切り泣いていい」って頭撫でてくれたんだ」

貴子「いいおじいちゃんだね」

拓海「ものすごく救われた……おじいちゃん、おばあちゃんが死んだとき、悲しすぎて涙が出なかったんだって。ただ、呆然としてたって。何も見えなくて、何も聞こえなくて、声も出なくて……そんな時、故郷のイタンキ浜に来た。そうしたら、砂に言われたんだって」

貴子「何て？」

拓海「泣いていいよって。一緒に泣いてあげるからって……おじいちゃん、子供みたい
に、わんわん泣いたって」

貴子「おばあちゃんのこと、ものすごく愛してたんだね」

拓海「その時、思ったって……人間は、どんなに泣いてもいいから、泣いた分だけ、し
っかりと強く生きていかないとだめだって。何があっても生きる。人が死ぬという
ことくらい、悲しくて辛いことはないんだからって」

貴子「泣いた分だけ、しっかりと強く生きていく……君のおじいちゃん、すごいね。す
ごい言葉、残してくれたんだね」

拓海「だから、どんなに辛くても死のうとだけは思わなかった。大丈夫だよ。僕は絶対に
生きる。強く生きていくために、泣きたかっただけだから」

貴子「絶対に生きるか……私たち、プライドや体裁、余計なものが入り込んでいたか
ら、素直に泣けなかったんだね」

拓海「鳴り砂と一緒に。汚れていると鳴かない」

貴子「鳴り砂が教えてくれていたんだね」

拓海「自然の力って偉大だよな。なんたって、天使の涙だもんな……実は、最初に貴子
さんに「死んじゃダメ」って飛びつかれた時……おじいちゃんのこと思い出し
て、少し涙出てたんだ」

貴子「えっ？」

拓海「恥ずかしくて、顔、隠したんだ。海にダイブしたおかげで、泣いてたのバレずにす
んだけど」

貴子「（笑って）そうだったの」

拓海「（照れながら）一生の不覚……」

貴子「これから先、泣きたくなったら、またイタンキ浜においで」

拓海「そっちこそ。泣きたくなったら、帰ってくれば」

SE 拓海の携帯が鳴る。

貴子「携帯鳴ってるよ」

拓海「あっ、うん。あっ……」

貴子「どうしたの？」

拓海「（驚いて）アニキからだ……」

貴子「ほらっ。早く、出ないと」

拓海「う、うん……もしもし。お兄ちゃん？……ううん、別に……ただの旅

行……：室蘭……うん……」

貴子M 「拓海の口元に笑みが浮かんだ。拓海は泣いて、泣いて、一歩前進したのだ」

SE 貴子の携帯が鳴る。

貴子M 「私の携帯？ あっ、自宅……………」

貴子「（震える声で）もしもし？」

健太郎（電話）「貴子……………」

貴子「（驚いて）健太郎さん？」

健太郎（電話）「……………お父さんの具合……………どう？」

貴子「うん……………もう、ぜんぜん大丈夫」

健太郎（電話）「そう、よかった……………」

貴子「心配してくれて、ありがとう……………」

健太郎（電話）「うん……………」

貴子「（涙をためて）今日、帰るから」

健太郎（電話）「うん……………」

貴子「じゃあね……………」

健太郎（電話）「ああ……………」

貴子M 「私の瞳からまた一粒涙がこぼれた」

SE （貴子）携帯を切る。

拓海「（冷やかす）健太郎さん、だって」

貴子「自分だって、お兄ちゃん。可愛い！」

拓海「ダンナと話できて、よかったじゃん」

貴子「そっちこそ。憎んでたら、心配の電話なんかしてこないよ」

拓海「本当に貴子さんと僕って、シンクロニシティだね」

貴子「（笑って）同時に電話くるなんてね。しかも、こんな朝方」

拓海「大泣きしてよかった」

貴子「私も……………ありがとう。拓海くんに会えてよかった」

拓海「だから会うことになってたんだって」

貴子「偶然、ううん、必然の一致だもんね」

拓海「そう。だから、貴子さんが、僕を思い出したり、また会いたいと思ったら、また必

然的に会えるってこと！」

貴子「じゃあ、お互い連絡は必要ないね」

拓海「うんって、それも寂しかったりして」

貴子「ははは」

拓海「あっ……朝日が昇ってきた」

貴子「また今日も、一日が始まるね」

拓海「うん……今日、東京に帰るよ」

貴子「そう……私も帰る……うん、帰ろう。それぞれの現実」

SE 穏やかな波の音がしている。

貴子M「イタンキ浜。アイヌ語で『ハワ・ノタ』、『声ある砂』。ピロードのような手触りの砂は、やさしく語りかけてくれる」

SE 鳴り砂の音。

貴子M「泣いていいよ。一緒に泣いてあげるから……」

SE 鳴り砂の音がつづいて。

貴子M「泣いた分だけ、しっかりと強く生きていこう。どんな現実が待っていようとも、私は、絶対に生きる」

完

鳴り砂と涙と道化師たち

2014年3月16日 発行

著者 三浦まどか

発行者 李鳳龍(オオハラ.李.ヒデハル)

発行所 描楽書蔵
郵便番号 135-0016
東京都江東区東陽1-28-13-401
お問い合わせ oohara.lee@ka-kuzo.jp
サイト <http://www.ka-kuzo.jp>

本作品のコピー、印刷、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。
本作品を代行業者等に依頼してコピー、印刷、スキャン、デジタル化する事はたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。